

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K17989

研究課題名(和文)日本語学習者の作文指導・学習の効率化に向けた「ねじれ文」に関する実証的研究

研究課題名(英文) Matching of the Subject and the Predicate in Japanese Language Learner's Writing: Basic Research to Improve the efficiency of Writing Instruction and Learning

研究代表者

小口 悠紀子 (Koguchi, Yukiko)

広島大学・大学院人間社会科学部研究科・准教授

研究者番号：70758268

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の成果のうち、二つを取り上げる。一つは小口(2017a,b)である。本稿では、作文においてねじれ文となりやすい抽象名詞・形式名詞を主題とする名詞述語文が、初級・中級の日本語教科書においてどのように扱われているかを明らかにした。もう一つは、小口・山田(2021)である。この論文では、上級日本語学習者の作文にあらわれる主語・述語の対応関係の不具合を調査し、母語話者の児童に見られる不具合と一見類似したものも見られるが、学習者の不具合には母語が影響している可能性があることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語教育において具体的な対策がとられてこなかった「主述の対応関係の不具合(ねじれ文)」について、本研究では学習者の実際の作文から主述の不具合と見られる文を抽出し、その特徴を分類・考察することで、母語が影響している可能性を指摘した。また、初級・中級教科書において、ねじれ文を引き起こしやすいとされる抽象名詞や形式名詞を主題とする名詞述語文がどのように扱われているかを調査し、その偏りを指摘した。こうした成果は今後の日本語教育における「主述の対応関係の不具合(ねじれ文)」に関する研究や、日本語教科書の記述・例文の扱いなどに活かすことができるものである。

研究成果の概要(英文)：We discuss two of the results of this research project. One is Koguchi (2017a,b). In this paper, I clarified how noun predicate sentences that take abstract and formal nouns as their subjects, which tend to become "NEJIRE-BUN" in composition, are treated in elementary and intermediate Japanese textbooks. The other is Koguchi and Yamada (2020). In this paper, they investigated the subject-predicate correspondence defects that appear in the compositions of advanced learners of Japanese and pointed out that some of the defects are apparently similar to those found in native Japanese-speaking children, but that the learners' defects may be influenced by their native language.

研究分野：日本語教育

キーワード：日本語教育 ねじれ文 モナリザ文 主述の不一致 作文 YNUコーパス 教科書分析 名詞述語文

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本語母語話者から見た日本語学習者の日本語能力未発達を疑わせる契機となり得る「ねじれ文」の使用・誤用実態に対する実証的研究である。

平成 21 年度全国学力・学習状況調査中学校国語 A で以下のような問題が出された。

【平成21年度全国学力・学習状況調査中学校国語A】(一部改)

この絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合います。

文の内容を変えないように、「合います」の部分を適切に書き直しなさい。



正解は「この絵の特徴は、どの角度から見ても女性と目が合うことです。」であるが、日本人中学生の正答率が 50.8%と極めて低いことが話題となった。上述のようなねじれ文とされる誤用については、現在、国語教育・国語学が連携して分析を進め、問題点の整理や改善を目指した研究が進められているが、同様の問題は日本語学習者の作文でも目立つ(例 1、2)。

【日本語学習者の実際の誤用例】

例1 先週、兄が私のパソコンを壊れました(→正:壊しました)。

例2 他の失敗したことは興味がない学科を選びました(→正:選んだことです)。

このような主述が一致していない誤用は、聞き手が動作主を正確に把握できず誤解を招いたり、まとまりある談話を構築できなかつたりする原因となる。しかし、日本語学習者を対象としたねじれ文の問題に関する研究は全く進んでいないことから、作文指導上の具体的な対策はとられていない。こうした分野に関しては従来、日本語母語話者を対象に構築された国語教育・国語学等の成果を日本語教育に応用してきた。

しかしながら、申請者が、『YNU 書き言葉コーパス』と作文を指導する教師へのインタビューをもとに学習者のねじれ文の問題を日本人小中学生と比較したところ、両者の特徴には興味深い相違が見られた。特に、学習者の場合は(1)成人であるにもかかわらず、(2)様々な母語話者に上級になっても観察され、(3)自己修正が可能な場合とそうでない場合があることが分かった。こうした傾向は日本人小中学生のねじれ文の問題が中学 2 年生頃までに減少することや、誤りの修正が求められる問題の正答率が極めて低い現状とは大きく異なる。

つまり、申請者の研究成果は、日本人小中学生と日本語学習者によるねじれ文の誤用は、表面上は同じねじれ文の問題に見えても、そのパターンや原因が異なる可能性があることを示唆している。この場合、日本語教育におけるねじれ文の問題を解決し、学習者の作文指導・学習の効率化に貢献するためには、実際の日本語学習者の習得実態に基づき、日本語学習者に特化した対策を打ち出すことが必須である。

本研究では、こうした申請者の主張に対してより厳密な根拠を得て、日本語作文指導への提案につなげるために、学習者を対象とした調査を行うものである。

2. 研究の目的

本研究は、日本語学習者の作文を支援するための文法習得研究を目的とする。

- (1) 日本語総合教科書に表れる抽象名詞・形式名詞を主題にとる名詞述語文の導入・練習がねじれ文を引き起こしやすい構成になっていないか、主述の不一致を自己修正できるような構造になっているかどうかを調査する。
- (2) 日本語学習者の作文から、主述が一致していない不具合を抽出し、構文・語彙により分類する。
- (3) 日本人小中学生の誤用と比較しながら、学習者が誤りやすいパターンを明らかにし、その原因を探る。

本研究の結果から、学習者が誤りやすいパターンを予測できれば、現状の日本語教育現場に対し、学習者データに基づく指導や時期、学習方法について具体的な提案を行うことができる。さらに、将来的には実践研究を通して指導効果を測ることで、日本語教育に寄与できる。

3. 研究の方法

主に行ったのは下記2点である。

(1) 初級・中級むけの日本語総合教科書にあらわれる抽象名詞・形式名詞を主題にとる名詞述語文を手作業で抽出し、その偏りについて調査分析を行った。

(2) 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』(通称 YNU 書き言葉コーパス)に収録されているデータのうち、「七夕」をテーマに書かれた作文資料を分析の対象とし、主語・述語の対応関係の不具合について分析を行った

(なお、コロナウイルス感染拡大の影響で海外の調査機関への渡航、国内での留学生への調査を当初の計画どおり実施することが困難になった。そのため(2)では、コーパスを用いる方法に変更した。)

4. 研究成果

日本語学習者の日本語能力推定において、「ねじれ文」が多発することでその日本語能力が低く見積もられることは深刻な課題であり、具体的な対策が不可欠であった。このような状況に対し、本研究では、主に下記の成果を査読付き学会誌に公表した。

(1) 小口(2017)では、日本語学習者の作文の問題点の1つとして、ねじれ文を取り上げ、ねじれ文が起こりやすい文構造が初・中級レベルの学習者を対象とした複数の日本語教科書においてどのように扱われているかを調査した。そして、日本語学習者の作文におけるねじれ文を防ぐため、現行の教科書やそれに基づく指導に不足している視点について考察を行った。

具体的には、初級、初中級、中級を対象とした日本語教科書全19冊において、名詞述語文「(抽象・形式名詞)は～ことです。」が導入される時期や、練習の内容について分析、考察を行った。その結果、名詞述語文「(抽象・形式名詞)は～ことです。」は初級の比較的早い時期で、主に趣味について語るという文脈の中で導入されることが分かった。この傾向は、小口(2017)で分析対象となった『みんなの日本語』と同じであった。ただし、『初級 日本語』や『Situational Functional Japanese』では、話題が趣味に限定されておらず、後者では「好きなことは友達と

話すことです。」のような応用力のある文が導入で用いられていた。

2) こと only is used in the following type of sentence:

[N] は [N] です sentence.

1. 私の趣味は本を読むことです。

My hobby is reading books.

2. 好きなことは友だちと話すことです。

My favourite pastime is talking with my friends.

(『Situational Functional Japanese Vol.2』 P.217)

練習問題については、趣味を主題として述語を選択、または産出するタイプがあったが、『まるごと』のように動詞述語と名詞述語から選択するタイプの問題だと、学習者は主題の名詞に対する述語形式に焦点を当てやすくなる可能性がある。このことから、述語の形式のみに焦点がある問題については、教師が練習問題の形式に少しの工夫を加えることで、主述の呼応に焦点を当てた問題にすることができ、学習者の意識化につながる可能性を指摘した。

① ただしいほうを えらびましょう。 (練習) 021

① 私のしゅみは おんがくを (a 聞くことです b 聞きます)。
でんしゃの なかで よく Jポップを (a 聞くことです b 聞きます)。

② 私のしゅみは 外国の コインを (a あつめることです b あつめています)。
あにと いっしょに (a あつめることです b あつめています)。

③ 私のしゅみは 外国語の べんきょうです。
いま、日本語を べんきょう (a することです b しています)。

(『まるごと』初級1A2 P.32)

(2) 小口・山田(2021)では、上級日本語学習者の作文にあらわれる主語・述語の対応関係の不具合を調査し、母語話者の児童に見られる不具合と一見類似したものも見られるが、学習者の不具合には母語が影響している可能性があることを指摘した。

具体的には、母語が異なる上級学習者の作文60編をもとにして、学習者の作文にあらわれる主述の対応関係の不具合に、どのような問題がどの程度起こるのかという実態を調査した。その結果、65例の不具合が見つかり、「主語と述語の不照応」「主語助詞の誤用」「主語または述語の脱落」の順で多く見られ、大まかな傾向については、松崎(2015)における母語話者の中学生と一致するものであった。しかし、実際に学習者の作文に現れた不具合を観察すると、助詞選択の誤りなど、母語の影響が疑われる事例があり、不具合が生じる原因については母語話者と異なる可能性が示唆された。さらに、最も不具合が多く見られた「主語と述語の不照応」については、「述語語句の不備」、「述語形式の不備」、「主述間の語句の重複」の順で不具合が多く観察された。「述語語句の不備」に関しては、母語話者の不具合とは性質が異なることから、学習者独自の習得上の問題として扱う必要があること、「述語形式の不備」については、母語に類似した形式を持たない中国語母語話者にとってとりわけ困難である可能性があること、「主述間の語句の重複」については、日本語の主題をあらわす「は」の機能について理解が必要であることが示唆された。

表1 学習者の作文における主述の対応関係の不具合の出現数と割合

種類	CL	CM	CH	KL	KM	KH	計	
(1) 主語または述語の重複	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	0 0%	
(2) 主語または述語の脱落	1 2%	0 0%	0 0%	0 0%	3 5%	2 3%	6 9%	
(3) 主語助詞の誤用	7 11%	2 3%	0 0%	1 2%	3 5%	3 5%	16 25%	
(4) 主語と述語の不照応	9 14%	5 8%	6 9%	9 14%	9 14%	5 8%	43 66%	
	述語語句の不備	6 9%	3 5%	3 5%	8 12%	4 6%	4 6%	28 43%
	述語形式の不備	2 3%	2 3%	3 5%	0 0%	4 6%	1 2%	12 18%
	主述間の語句の重複	1 2%	0 0%	0 0%	1 2%	1 2%	0 0%	3 5%
主述の対応関係の不具合 合計	17 26%	7 11%	6 9%	10 15%	15 23%	10 15%	65 100%	
不具合がある作文数/各10本	8 21%	5 13%	5 13%	6 16%	8 21%	6 16%	38 100%	

(小口・山田 2021:190)

引用・参考文献

小口悠紀子(2017)『初・中級教科書における名詞述語文(抽象・形式名詞)は～ことです。』

の扱い-学習者の作文に現れるねじれ文の問題から-」『日本語研究』37号,pp.19-31.

小口悠紀子・山田実樹(2016)『日本語学習者の作文に表れる主述の不一致 中国語母

語話者と韓国語母語話者を対象に』, Proceedings of the 11th International

Symposium on Japanese Language Education and Japanese Studies (The Open

University of Hong Kong:Hong Kong)

小口悠紀子・山田実樹(2021)『上級日本語学習者の作文に現れる「主述の対応関係の不具

合」の実態 作文指導・学習の効率化を目指すための基礎研究』, 日本語/日本語教育

研究, 12巻, pp. 181-196.

砂川有里子(2019)『名詞述語文の習得に関わるねじれ文と「は」「が」の誤用につい

て 学習者の縦断的な作文コーパスの分析から』, 迫田久美子・野田尚史編『学

習者コーパスと日本語教育』, くるしお出版

松崎史周(2015)『中学生の作文に見られる「主述の不具合」の分析 出現傾向から学習者の表

現特性を探る-』『解釈』61,第5・6月,pp.12-20.

資料

『まるごと初級1 A2 րիկի』(2014) 独立行政法人国際交流基金

『Situational Functional Japanese Vol.2 第二版』(1996) 筑波ランゲージグループ

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Koguchi Yukiko	4. 巻 -
2. 論文標題 "Expressions to describe an unexpected event in intermediate learners' writing: A comparison with oral story telling tasks"	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 EAJS2017 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小口悠紀子	4. 巻 9
2. 論文標題 「話す」と「書く」という課題の違いが中級学習者の語りに及ぼす影響 個人内における接続表現の変異に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語 / 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小口悠紀子	4. 巻 37
2. 論文標題 初・中級教科書における名詞述語文「(抽象・形式名詞)は～ことです。」の扱い - 学習者の作文に現れるねじれ文の問題から -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語研究	6. 最初と最後の頁 121-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小口悠紀子	4. 巻 513-7
2. 論文標題 初級日本語教科書にあらわれる名詞述語文について 導入・練習を例に	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 19 - 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小口悠紀子・山田実樹	4. 巻 12
2. 論文標題 上級日本語学習者の作文に現れる「主述の対応関係の不具合」の実態 作文指導・学習の効率化を目指すための基礎研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語 / 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 181,196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 小口悠紀子・帖佐幸樹	4. 巻 13
2. 論文標題 初級日本語教科書で「てあげる」はどう扱われているのか (印刷中)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語 / 日本語教育研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Koguchi Yukiko
2. 発表標題 Expressions to describe an unexpected event in intermediate learners' writing: A comparison with oral story telling tasks
3. 学会等名 Eajs2017 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies, The Universidade NOVA (ポルトガル) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小口悠紀子
2. 発表標題 タスクベースの日本語指導-第二言語習得理論に基づく授業実践-
3. 学会等名 ポーランド日本語教師会、ワルシャワ大学 (ポーランド) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小口悠紀子
2. 発表標題 日本語学習者を対象とした第二言語習得研究の理論と方法
3. 学会等名 中国語話者のための日本語教育研究会、西安外国語大学（中国）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山田 実樹 (Yamada Miki)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
その他の国・地域	世新大学（台湾）		